

変数係数線形常微分方程式

$$\frac{d}{dt} \begin{pmatrix} x_1 \\ \vdots \\ x_n \end{pmatrix} = A(t) \begin{pmatrix} x_1 \\ \vdots \\ x_n \end{pmatrix} + \begin{pmatrix} b_1(t) \\ \vdots \\ b_n(t) \end{pmatrix} \text{ を考える。 } \begin{pmatrix} b_1(t) \\ \vdots \\ b_n(t) \end{pmatrix} = 0 \text{ のとき同次形とい$$

うが、このとき解の空間は、 n 次元ベクトル空間である。すなわち $t = t_0$ における

$$\text{初期値 } \begin{pmatrix} x_1^0 \\ \vdots \\ x_n^0 \end{pmatrix} \text{ によって解は定まり、 } \begin{pmatrix} x_1(t) \\ \vdots \\ x_n(t) \end{pmatrix} = G(t) \begin{pmatrix} x_1^0 \\ \vdots \\ x_n^0 \end{pmatrix} \text{ と書かれる。ただし}$$

$G(t_0) = I$ (単位行列) である。ここで、 $\frac{d}{dt}G(t) = A(t)G(t)$ となる。 $G(t)$ の第 j

列は $\begin{pmatrix} \vdots \\ 1 \\ \vdots \end{pmatrix}$ を初期値とする解である。

$\det G(t)$ を知ることは、解についていくつかの予測をする上で重要である。すなわち、 $\det G(t)$ は t_0 における体積 1 のものが t においてどうなっているかを示す。もしも、 $t \rightarrow \infty$ のときにすべての解が 0 に収束するならば、 $\det G(t) \rightarrow 0$ となるはずである。

このとき、

定理 (リウビルの公式)。 $\det G(t) = e^{\int_{t_0}^t \text{tr}A(s)ds}$ が成立する。

言葉をかえて言うと、 $\det G(t)$ は、 $\frac{d}{dt} \det G(t) = \text{tr}A(t) \det G(t)$, $\det G(t_0) = 1$ を満たす。すなわち、 $\det G(t)$ は、常微分方程式 $\frac{dx}{dt} = \text{tr}A(t)x$, $\det x(t_0) = 1$ の解である。

実際 $G(t) = \begin{pmatrix} g_1(t) \\ \vdots \\ g_n(t) \end{pmatrix}$ であるとする ($g_i(t)$ は第 i 行) と、 $\frac{d}{dt}G(t) = A(t)G(t)$ は

$$\frac{d}{dt}g_i(t) = \sum_{j=1}^N a_{ij}(t)g_j(t) \text{ ということである。}$$

$$\begin{aligned}
& \frac{d}{dt} \det G(t) \\
= & \det \begin{pmatrix} \frac{dg_1}{dt}(t) \\ g_2(t) \\ \vdots \\ g_n(t) \end{pmatrix} + \det \begin{pmatrix} g_1(t) \\ \frac{dg_2}{dt}(t) \\ \vdots \\ g_n(t) \end{pmatrix} + \cdots + \det \begin{pmatrix} g_1(t) \\ g_2(t) \\ \vdots \\ \frac{dg_n}{dt}(t) \end{pmatrix} \\
= & \det \begin{pmatrix} \sum_{j=1}^n a_{1j}(t)g_j(t) \\ g_2(t) \\ \vdots \\ g_n(t) \end{pmatrix} + \det \begin{pmatrix} g_1(t) \\ \sum_{j=1}^n a_{2j}(t)g_j(t) \\ \vdots \\ g_n(t) \end{pmatrix} + \cdots + \det \begin{pmatrix} g_1(t) \\ g_2(t) \\ \vdots \\ \sum_{j=1}^n a_{nj}(t)g_j(t) \end{pmatrix} \\
= & \sum_{j=1}^n a_{1j}(t) \det \begin{pmatrix} g_j(t) \\ g_2(t) \\ \vdots \\ g_n(t) \end{pmatrix} + \sum_{j=1}^n a_{2j}(t) \det \begin{pmatrix} g_1(t) \\ g_j(t) \\ \vdots \\ g_n(t) \end{pmatrix} + \cdots + \sum_{j=1}^n a_{nj}(t) \det \begin{pmatrix} g_1(t) \\ g_2(t) \\ \vdots \\ g_j(t) \end{pmatrix} \\
= & \sum_{j=1}^n a_{jj}(t) \det \begin{pmatrix} g_1(t) \\ g_2(t) \\ \vdots \\ g_n(t) \end{pmatrix} = \operatorname{tr} A(t) \det G(t)
\end{aligned}$$

注意。 $A(t) = A$, $G(t) = e^{tA}$ のとき、 $\det e^{tA} = e^{t \operatorname{tr} A}$ となる。これはジョルダン標準形からも容易に示される。

言葉。

$\frac{d}{dt} \vec{y} = A(t) \vec{y}$ の解 $\vec{y}_1(t), \dots, \vec{y}_n(t)$ が一次独立のとき、 $\vec{y}_1(t), \dots, \vec{y}_n(t)$ を一組の基本解あるいは解の基本系と呼ぶ。

基本解を並べた行列 $G(t)$ を基本解行列と呼ぶ。 $G(0) = I$ となるとは限らない。

2つの基本解行列 $G_1(t), G_2(t)$ に対し、 $B = G_1(t_0)^{-1} G_2(t_0)$ とおくと、 $G_2(t) = G_1(t)B$ 。

注意。基本解行列 $G(t)$ に対し、 $\det G(t)$ は $\frac{dx}{dt} = \operatorname{tr} A(t)x$ を満たし、 $\det G(t) = e^{\int_{t_0}^t \operatorname{tr} A(s) ds} \det G(0)$ となるから、 $\det G(t)$ の変化の割合 $e^{\int_{t_0}^t \operatorname{tr} A(s) ds}$ は、基本解行列 $G(t)$ のとり方によらない。

随伴線形微分方程式. 基本解行列 $G(t)$ は $\frac{d}{dt} G(t) = A(t)G(t)$ を満たす。ここで、逆行列を考える。 $G(t)^{-1} = H(t)$ とすると $I = G(t)H(t)$ を微分して、

$$\begin{aligned}
0 &= \left(\frac{d}{dt} G(t) \right) H(t) + G(t) \left(\frac{d}{dt} H(t) \right) \\
&= A(t)G(t)H(t) + G(t) \left(\frac{d}{dt} H(t) \right) \\
&= A(t) + G(t) \left(\frac{d}{dt} H(t) \right)
\end{aligned}$$

従って $\frac{d}{dt} H(t) = -H(t)A(t)$. 転置行列をとれば $\frac{d}{dt} {}^t H(t) = -{}^t A(t) {}^t H(t)$.

すなわち、 $\frac{d}{dt}\vec{z} = -{}^tA(t)\vec{z}$ の基本解行列の 1 つは ${}^tG(t)^{-1}$ で与えられる。

この微分方程式 $\frac{d}{dt}\vec{z} = -{}^tA(t)\vec{z}$ は $\frac{d}{dt}\vec{y} = A(t)\vec{y}$ に随伴する線形微分方程式と呼ばれる。

線形微分方程式 $\frac{d}{dt}\vec{y} = A(t)\vec{y}$ と、それに随伴する線形微分方程式 $\frac{d}{dt}\vec{z} = -{}^tA(t)\vec{z}$ の解、 $\vec{y}(t), \vec{z}(t)$ に対して、

$$\frac{d}{dt}(\vec{z}(t) \bullet \vec{y}(t)) = (-{}^tA(t)\vec{z}(t)) \bullet \vec{y}(t) + \vec{z}(t) \bullet (A(t)\vec{y}(t)) = 0$$

となる。従って、 $\vec{z}(t) \bullet \vec{y}(t)$ の値は一定である。

特に、 $A(t)$ が交代行列 (${}^tA(t) = -A(t)$) であれば、 $\|\vec{y}(t)\|$ は定数となり、 $G(0) = I$ となる基本解行列 $G(t)$ は直交行列となる。実際、

$$\begin{aligned} \frac{d}{dt}({}^tG(t)G(t)) &= \left(\frac{d}{dt}{}^tG(t)\right)G(t) + {}^tG(t)\left(\frac{d}{dt}G(t)\right) \\ &= {}^tG(t){}^tA(t)G(t) + {}^tG(t)A(t)G(t) = 0 \end{aligned}$$

で、 ${}^tG(0)G(0) = I$ だから、 ${}^tG(t)G(t) = I$ 。

「随伴する」という考え方は、 $L = \frac{d}{dt} - A(t) : \text{Map}(\mathbf{R}, \mathbf{R}^n) \rightarrow \text{Map}(\mathbf{R}, \mathbf{R}^n)$ と内積 $\langle \vec{f}, \vec{g} \rangle = \int_a^b \vec{f}(t) \bullet \vec{g}(t) dt$ について $\langle L^* \vec{f}, \vec{g} \rangle = \langle \vec{f}, L \vec{g} \rangle$ すなわち、普通の行列だったら、(共役)転置行列となるものを考えるということである。随伴するものと等しければ、対称行列と同様の良い性質を持つことが期待でき、随伴するものと合わせて 0 になれば、反対称行列と同様の良い性質を持つことが期待できる。

$$\begin{aligned} &\langle \vec{f}, L \vec{g} \rangle \\ &= \int_a^b \left(\vec{f} \bullet \frac{d\vec{g}}{dt} - \vec{f} \bullet (A(t)\vec{g}) \right) dt \\ &= \left[\vec{f} \bullet \vec{g} \right]_a^b - \int_a^b \left(\frac{d\vec{f}}{dt} \bullet \vec{g} + ({}^tA(t)\vec{f}) \bullet \vec{g} \right) dt \\ &= \langle L^* \vec{f}, \vec{g} \rangle \end{aligned}$$

だから、 a, b で $\vec{0}$ になる関数を扱っていれば、 $L^* = -\frac{d}{dt} - {}^tA(t)$ となる。

ここで、 a, b で $\vec{0}$ とならない場合についても $L^* = -\frac{d}{dt} - {}^tA(t)$ として書いた $\langle \vec{f}, L \vec{g} \rangle - \langle L^* \vec{f}, \vec{g} \rangle = \left[\vec{f} \bullet \vec{g} \right]_a^b$ ，すなわち

$$\vec{f}(b) \bullet \vec{g}(b) - \vec{f}(a) \bullet \vec{g}(a) = \int_a^b \left\{ \vec{f}(t) \bullet \left(\frac{d}{dt} \vec{g}(t) - A(t) \vec{g}(t) \right) + \left(\frac{d}{dt} \vec{f}(t) + {}^tA(t) \vec{f}(t) \right) \bullet \vec{g}(t) \right\} dt$$

をグリーンの公式と呼ぶ。

非同次の場合。

$\frac{d}{dt}\vec{y} = A(t)\vec{y} + \vec{b}(t)$ に対して、定数変化法を試みることが出来る。基本解行列 $G(t)$ について、 $\vec{y}(t) = G(t)\vec{z}(t)$ とすると、

$$\frac{d}{dt}(G(t)\vec{z}(t)) = A(t)G(t)\vec{z}(t) + G(t)\frac{d}{dt}\vec{z}(t) = A(t)G(t)\vec{z}(t) + \vec{b}(t)$$

を得る。

従って $\frac{d}{dt}\vec{z}(t) = G(t)^{-1}\vec{b}(t)$ となるように $\vec{z}(t) = \int_{t_0}^t G(s)^{-1}\vec{b}(s)ds$ とすればよい。

$$\frac{d}{dt}\vec{y} = A(t)\vec{y} + \vec{b}_i(t) \text{ の解 } \vec{y}_i(t) \text{ が見つかっているとき、} \frac{d}{dt}\vec{y} = A(t)\vec{y} + \sum_{i=1}^N c_i \vec{b}_i(t)$$

の解は $\sum_{i=1}^N c_i \vec{y}_i(t)$ で与えられる。(重ね合わせの原理)

周期的な係数を持つ線形常微分方程式。

変数係数線形常微分方程式で最も面白いのものは $A(t)$ が周期的であるときである。 $A(t+T) = A(t)$. このとき、 $G(t+T) = G(t)B$ となる。 $G(t+NT) = G(t)B^N$ だから、 B を求めることが出来れば、解の様子はかなり良くわかる。 B はフロケ Floquet の行列と呼ばれる。